

250語でギリシア語が話せるの？

－会話帳づくりの裏側－

村田 奈々子

外国語を話すために最低限必要な語彙数はいくつだといったことはよく耳にする。しかしその外国語を使用する当事者の目的や興味、関心によってその語彙数は大きく変わってくるし、その人の性格にも大きく左右されるものであって、決して一般化できるものではない。

もし、ツアーで旅行に参加するならば、一言も現地語を発せずとも過ごすことができる。多少外国語に興味がある場合は、「ありがとう」「こんにちは」「さようなら」を覚えて満足するということもあろう。それも立派な外国語だ。一方、たとえば文化人類学者は、その国の生活文化全般にわたる語彙とそれが指し示している意味内容にまで深く立ち入ることになるだろう。外国語は英語さえできればよいのだ、と考える人はどこに言っても英語だけで押し通す。日本語だけで長期間海外に滞在することも可能だ。外国語に対する各人の取り組みはまさに千差万別である。

そのようなわけで、書店の棚に並べられている外国語会話の本の種類も豊富である。その中でも、たった「250語」で会話ができることをタイトルに掲げた白水社の会話帳シリーズはなんだか怪しい。その通りである。250語で相手を想定した「会話」なんか絶対に無理だろう。250語でできるのは、せいぜい「発話」することぐらい。つまり、相手の言っていることはチンプンカンプンでも、とにかく自分の意志（しかもごく初歩的な）を伝えるのが関の山だ。

「250語でできる現代ギリシア会話」の執筆に際して、白水社の編集者から、①旅行者向けであること、②過去形は使わないこと、という2点の他は特に注文はなかった。「250」という数は、20～23課から構成され、それぞれの課で10～12語くらいの単語や表現を「覚えましょう」というところから換算される語数だろうと、もうひとりの執筆者である名古屋大学の周藤芳幸助教授が発見(?)した時、妙に納得した。なるほど、「250」という数字に別に言語学的な

裏付けがあるわけではないのか！とちょっと気分が楽になった。そう、この会話帳は、「会話」をすることそれ自体よりも、旅行がてらに「現代ギリシア語」に興味を持ってもらうためのガイドブックと考えてもらうのが一番よい。

250語で会話をつくる作業が始まった。私たち2人は名古屋と東京と離れてはいたが、電子メールとファクスのおかげで技術的な問題は何もなかった。ただし、ギリシア文字は電子メールで送れないので、連絡事項以外はファクスを使用することが多かった。あるとき私が帰宅してみると、部屋の床一面が周藤氏から送られたファクスで覆われていて驚いたこともあった。

執筆分担については、基本的な表現と文法についてまとめた前半の「読んでおいてください」を周藤氏が、各課のコラムと、巻末の「表現あれこれ」を私が担当し、各課の内容や表現については2人共同で進めるということになった。もちろん、お互いが執筆した箇所は、交互に目を通してコメントしあった。周藤氏は、仕事を早くしかも正確にこなしていくので、私も迷惑をかけまいと、この時ばかりはがんばった。

ギリシア旅行のストーリーは比較的すんなりと決まったと記憶している。そのストーリーを各課に振り分け、まずはギリシア語で文章をつくった。そして、その表現の中から基本的な文法事項をとりあげて説明するという手順をとった。この方法だと、会話は比較的自然につながるが、全体を通して文法を体系的に網羅することはできないという短所がある。いきあたりばったりの文法説明に不満を抱く人がいてもおかしくない。それを承知の上で、この本は文法書ではないのだからと言い逃れをすることは許されないだろうか(?)。

文法よりも私たちが重要視したのは、ギリシア人の生活習慣をストーリーや説明の中に織り込むことだった。欲張りな私たちは、日本人が持っている今までのギリシアのイメージをちょっと変えてみたかった。「青い空」に「青い海」そして「白亜の家並」—お決まりの売り文句が蔓延してしまったおかげで、今のギリシアの「ナマ」の姿とその魅力が一向に伝わっていないのが歯がゆかった。特に近現代史を専攻している私は、アクロポリスの下で生きた栄光の古代ギリシア人よりも、今を生きるギリシア人にも興味をもってほしいと常々考えていた。この意見に古代史専門の周藤氏も賛成してくれたことはとても嬉しかったし、この会話帳の特徴のひとつになったのではないかと自負している。特に、コラムについては、私自身の留学体験をもとに楽しみながら自由に書かせてもらった。

ネイティヴによる文章のチェックと録音は私の2人のギリシア人の友人が手

伝ってくれた。過去形を使えないという条件のため、多少の不自然さには我慢してもらい、いざ銀座のスタジオで録音ということになった（録音は夏に行われ、周藤氏はエジプトでの発掘調査をおこなっていたため参加できなかった）。女性の声は、ペロポネソスのアルゴス出身で日本人の夫を持つアナスタシアが、男性の声は、テッサロニキ出身で現在東京工業大学に留学中のコスタスがそれぞれ担当した。聴覚の優れた方なら気づかれるだろうが、コスタスの発音は北ギリシア特有の深くて重い「ラムダ」の音を持っている。この音はアテネを含むアッティカ地方出身の人には田舎臭く響くらしいが、私には気にならない。というのは、私自身がテッサロニキで暮らしている間に、この田舎臭い「ラムダ」の音を無意識のうちに習得してしまったからだ。

慣れない機材のあるスタジオという環境で彼ら2人は緊張していたが、なんといっても、彼らが一番苦労したのは、ギリシア語を極端に遅く読まなくてはならないということだった。録音技師の方からの注文を彼らに伝える役だった私は、何度も彼らにゆっくり読んでもらうように頼んだ。ちなみに、日本語のナレーションは、興味本位でやらせてもらった、でしゃばりな私自身の声である。編集者には、ナレーター代がういたと感謝された。イラストは、これもまた私の友人が絵ハガキや写真を参考に、素敵なものに仕上げてくれた。表紙には、アクロポリスや教会といったいかにも「ギリシア」と象徴するものは避け、アナスタシアの甥と姪の写真を使用した。そちらのほうが、ギリシア語が生きた言葉として理解されるのではないかと思ったからである。

このように、和気あいあいとした家内工業的な形で私たちの「250語でできるやさしい現代ギリシア会話」は完成した。再三の校正にもかかわらずつづりのミスもかなりある。文法的な面では不十分極まりないだろう。それでも、読者の方からのお手紙の中に「現代ギリシアへの興味が湧いた」、「たのしく読ませてもらった」という文章を見つけると、私たちの目的は達成されたのではないかしらと思う。そして、そのような読者の方はきっと250語で、少なくとも「発話」できるようになっていることを私は期待している。